

無理に設定保育に誘い込まない

子どもが登園してきて、なお不安感を持っているようなときには、無理に保育活動に入れなくて、グループの外から見ているようなゆとりの時間を与えてあげます。これは、子どもに保育室で遊ぶことに安心を感じさせるとともに、子ども自身が何をやりたくて、何をしたくないかを分かってくれているという信頼感を持つようになります。子どもが不安感を持っているようなときに、保育活動に参加するように強いたりすれば、保育者への拒否感も強くなる危険性があります。保育者が無理強いしないことを子どもが知ること、子どもはより強い安心を手にするのと同時に、少し待つてあげることで、自分で何かをやろうとする内的動機も喚起されます。

このような子どもを見かけました

パニックになると突如後にひっくり返ります。気に入らないことがあると自分の体をたたき、隣の子どもを引っ掻きます。私は先週この子のいす取りゲームを見ました。調子よくゲームが展開し彼も椅子を取っていました。終わりの3人ぐらいになったときに、彼はいすが取れませんでした。すると突然いすを放り投げて担任の先生に抱きつかしました。

5歳ですが担任の先生とはしゃべることはできますが、独特なしゃべり方です。理由は分からないのですが、黄色い色に固執するのです。保育園の園庭にある黄色い遊具は全部自分のものです。他の子が触れば大変です。

対人関係や家庭状況はとてもしんどいです。両親は離婚していて、彼の面倒はお母さん、おばあちゃん、おばあちゃんの兄弟姉妹の家を転々としています。典型的な睡眠不足です。なかなか寝ずに、寝たら3時半ぐらいまでは起きません。多分家では10時、11時まで起きているのでしょう。しかも3カ所を転々としますから生活の拠点が決まらないのです。傍目から見て、お母さんも精いっぱいやっているのです。

ネグレクトは子どもの脳を萎縮させる

18歳の若いママが書いたものをインターネットで見つけました。『さあ、何枚割れば気が済むわけ？ あんたもう5歳でしょう、一応うちが母親ってことになってるから飼育するけど、早く死なないかなあ』と書いてあります。多分冗談だと思いますが、このお母さんはキャバクラで男から毎月30万円のお小遣いをもって、生活保護を十数万円もらっているのを、インターネットで書いています。これは冗談であってほしいです。

健全な家庭で育った子ども（3歳児）の脳の大きさと、何らかの形で機能不全な家庭で育った子どもの脳の大きさを比べた写真がアメリカで発表（1990年）され、世界中がびっくりしました。幼児期にネグレクトを受けた子どもの脳が萎縮していることが分かったのです。そこで、ネグレクトは親のしつけではありません、親の育て方でもありません、根本的な子どもの人権なのです。

ヒドン・カリキュラム（隠されたカリキュラム）

子ども自身がどうしようもない状況に置かれている、ネグレクトという意味ではありませんが、家庭状況から逃れない子どもがたくさんいます。隠されたカリキュラムと呼ばれ、子どもの発達の半分は家庭資源が原因なのです。お金があるないだけの話ではありません。総合的な家庭の持つポテンシャル、いわゆる潜在能力が子どもの成長の半分に影響していることが分かってきました。

また、保育者が子どもに何気なく話している言葉に、その保育者が育ちで作られた否定的な表現が多いこともわかってきました。

「おまえできへんな」といわれて育った子どもは、本当にできなくなります。母親が娘のあらゆることに口を出す親子関係がマスコミで話題になっています。

「おまえはお父ちゃんに似ている」。パートの女性が幼い頃から絶えず母に「おまえは父ちゃん似や、父ちゃん似や」といわれたのが強烈なショックだった。物心ついた頃から母親は父について頼りない人、遊んでばかりと悪口ばかりいい続けてきました。父親に似ているといわれ続けてきた自分は、自分の存在さえも嫌になってきました、これを毒親とマスコミ用語でいわれています。実は先生がたにもあるのです。私は年齢的に耳が聞こえにくくなってきましたが、耳が聞こえにくい人は記憶力が弱いと10回いわれたら、本当に記憶力は落ちるという実験があります。

「隠れたカリキュラム」というアメリカのシカゴ大学の先生の説です。

私たちも先生がたも、何げない発言をしています。保育中に何々ちゃんと尋ねても返事をしない子がいます。すると先生は次の子に何々ちゃんといとも簡単に指名します。発言しなかった子どもは、黙っていても誰かが発言するという意識を持ちます。「はい、分かった人」と手を挙げさせます、手を挙げなかった子は、自分は挙げなくても誰かが手を挙げてしゃべるのだ、先生が代わりに話すのだという意識を持ちます。